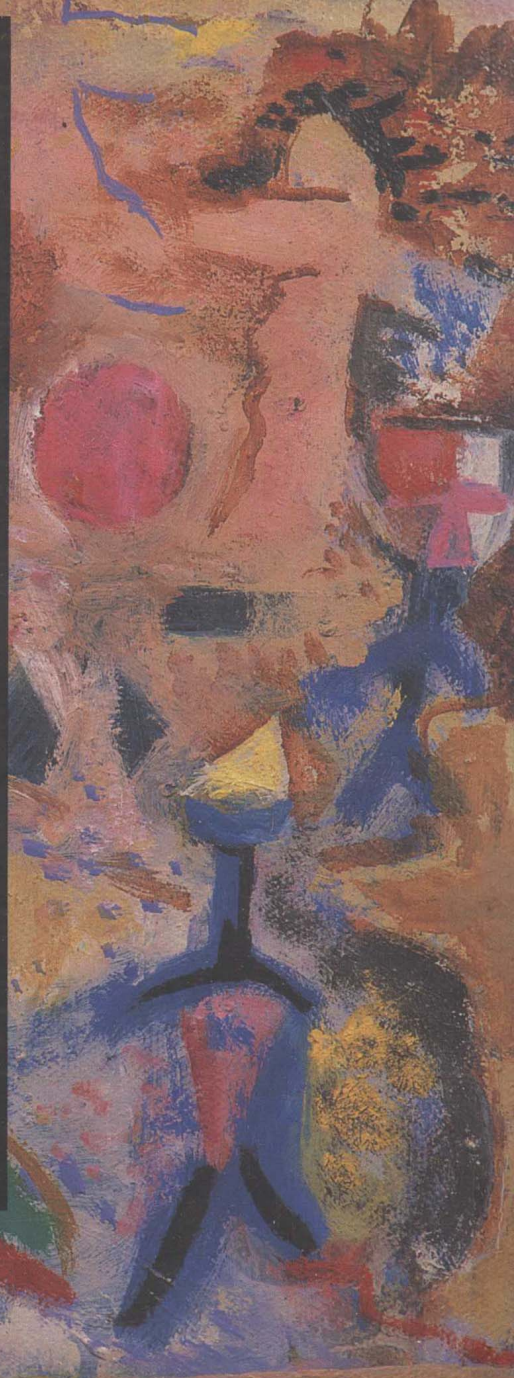


風と歌おう

立松和平対談集



風と歌おう
立松和平対談集

家の光協会

●立松和平（たてまつ・わへい）

一九四七年栃木県に生まれる。

早稲田大学経済学部卒業。多数のアルバイト、宇都宮市職員を経て、本格的な文筆活動に入る。

『自転車』で早稲田文学新人賞

（一九七〇年）、『遠雷』で野間文

芸新人賞（一九八〇年）、『卵洗い』

で坪田譲治文学賞（一九九三年）を

受賞。行動派作家として、小説、

紀行、ルポルタージュ、エッセイ

など数多くの作品を発表するかた

わら、テレビ番組でも活躍中。

主な著書に『風と話をうー立松

和平対談集』（家の光協会）、『春

雷』（『地上』連載、河出書房新

社）、『歓喜の市』（集英社）、『ア

ジア河紀行』（佼成出版社）、『サ

ンダーバード』（文藝春秋）などがある。

風と歌おう

——立松和平対談集——

平成五年六月一日 第一版発行

著者 立松和平

発行者 角中正也

発行者 社団法人 家の光協会

東京都新宿区市谷船河原町十一（千一六二）

電話 〇三（五二六一一二三〇一）（図書販売）

振替 東京五―四七二四（三二六六―九〇二八）（図書編集）

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 寿製本株式会社

落丁本や乱丁本はおとりかえいたします。
定価は表紙カバーに表示してあります。

風と歌おう

立松和平対談集



もくじ

I 風と遊ぶ

漆黒の闇に歌う怖さとすごさ 都はるみ 6

音楽のルーツは故郷津軽の風土 吉 幾三 21

自然と対話する時間がもつとも幸せ 星野知子 37

大自然の音楽は民族の壁を超越する 坂田 明 64

生命の尊さを感じる溪流釣りの魅力 根津甚八 78

自分らしい音が見つかる田舎暮らし 宗次郎 92

II 風に走る

三分間に人生を賭ける一発勝負 ガッツ石松 106

人気と勝負は違う厳しい相撲の世界 二子山利彰親方 123

沖繩のリングからチャンピオンへ 平仲明信 147

好奇心とバイクで突き進む南極の白い闇 風間深志 162

III 風を想う

人々との出会いからニュースが生まれる 山根基世 178

親の人生が反映する子どもとの関係 戸川昌子 195

粹で奥深い江戸の生活から学ぶ 杉浦日向子 207

青春の旅は人生の重要な転機 五木寛之 223

トマトが語る人々の文化と歴史 阿川佐和子 236

太陽のにおいを感じる野菜のおいしさ 嵐山光三郎 249

あとがき

261

装画Ⅱ梁島晃一

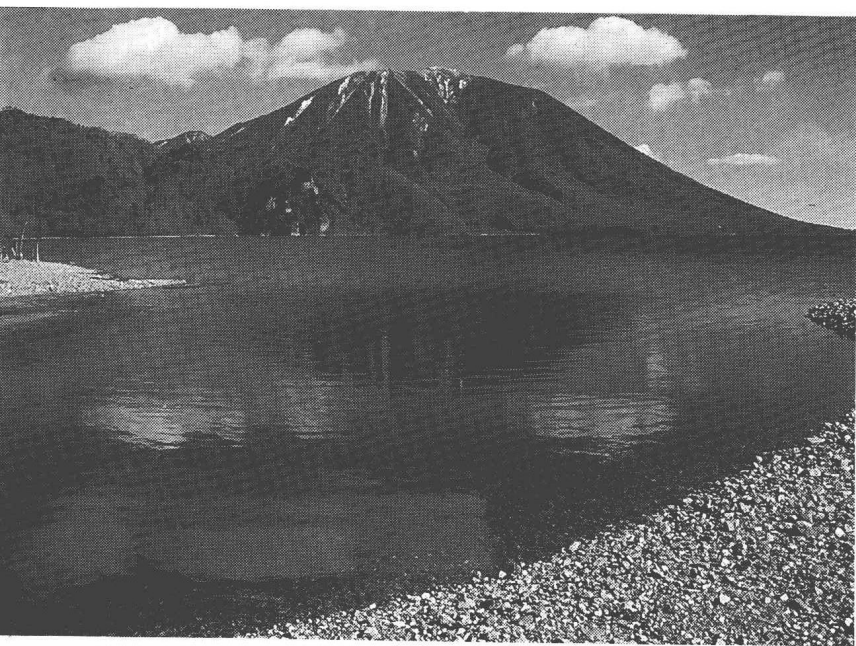
表紙カバー・中扉写真Ⅱ立松和平

対談写真Ⅱ家の光協会写真部ほか

編集協力Ⅱ横山純一、ばらデザイン

●この対談集は家の光協会発行『地上』誌に平成三年一月より連載している「立松和平のふるさとトーク」からの抜粋を主とし、『家の光』『ウータン』『主婦の友』『Vegeta』、報知新聞掲載の記事を加えて構成したものです。なお、対談者の肩書きなどについて、とくに記載のないものは対談当時のままとしております。

I 風と遊ぶ



日光

漆黒の闇に歌う怖さとすごさ

● 都はるみ——歌手

● 大衆の夢を歌い続ける

立松 コンサートツアー、明日は群馬県ですね。

都 はい。明日が群馬で、それから静岡……。十一月（一九九二年）までで七〇か所ぐらいになるんですけどね。

立松 うわっ（笑）、ぼくは神奈川県民ホールで見せていただいたんですけど、すばらしかったです。

都 ありがとうございます。

立松 素朴な疑問なんですけど、あんなに歌い続けてのどというか、べつにどうっていうこと

はないんですか。

都 いまんとこどうつていうことはないですね。昔はけっこう何回も着替えたりとか、着替えるたんびにお茶を飲みましたけどもね。いまは出たらぜつたいに何も飲めないという状況でやっております。

立松 最後の一回だけでしたよね、着替えたのは。

都 そうです。いちばん最後のところですね。

立松 あんなに歌い続けていてね、小さな体でよくスタミナがあるなって、やっぱりプロなんだなと思いました。

都 いや、そんなこともないけど。

立松 客席にいるとため息がもれるの。「うまいねえ」「うまいねえ」って。

都 いやいやいや、もううまくなんかありません。

立松 いや、うまいですよ、こんどの『つくしんぼ』とかすごくよくて。ぼくはあの歌を聴いて、こういう女性がそばにいるといいなと思った（笑）。そういう夢みたいだね、なんか大衆の夢を歌ってるなあ。

都 そうですね。水木かおるさんに詞をいただいたときにね、つくしんぼって、ほんとにめだたないんですけども、一年に一回、春、ちょこっと顔を出してね。花言葉を見ますと「向上心」なんですって……。ああ、なるほどなって。なんかこう、一生懸命生きているって、そう

いう感じを男と女の物語にしたいだいて、なんかすごく感激しちゃったんですけども。

立松 おもしろい言葉の使い方ですね。発売は四月一日ですか。

都 そうです。

●地下鉄に乗るのは難しい

立松 ちょうど季節だけでも、つくしんぼなんて見る機会はあるんですか。

都 わたしは、おひたしですか、それは見たことあるんですけどねえ（笑）。実際に芽を出しているなんていうのはちょっと……。

立松 やっぱり外へ出る時間というのはいませんか。

都 いえ、そんなこともないんですけども、散歩がてらに歩いて外に出るっていうのはいけませんね。ほとんど車で出て、ちょこつと降りて仕事していくっていう感じで。ほんととはそれじやいけないのかもしれませんがね。

立松 地下鉄なんかは乗らないでしょう？

都 やめてから一回だけ。青山一丁目から渋谷まで。

立松 すぐじゃないですか。二つか三つぐらい。（笑）

都 そうなんです。でもどつちから乗っていいのかわかんなかったですね。ほんとに時の流れって恐ろしいもので……。

I 風と遊ぶ——都はるみ



都はるみ（みやこ・はるみ）

一九四八年京都府生まれ。一六歳のときに『困ることヨ』でデビュー。同年、『アンコ椿は恋の花』でレコード大賞新人賞。数々のヒットを飛ばし、八四年に引退。九〇年に『小樽運河／千年の古都』で復活。九三年三月、『あなたの隣りを歩きたい』を発売。現在、全国コンサートツアー中。

立松 ふつうのおばさんのときには、地下鉄とかバスとかに乗っていたんですか？

都 いえ、ですからそれ一回だけ。やっぱりこれは難しいわって思いましたね（笑）。もうずいぶん古い話ですけども、一五歳ぐらいのときに東京に出てきましたでしょう、そのころは新橋にコロムビアがありましたものですから、地下鉄も使ったしバスにも電車にも乗りましたし、わりと平気で乗れてたんですよ。それからデビューしても二〇年間、ほとんどそういうことをしていないとか……。いやあ、恐ろしいですよ、これは。（笑）

立松 一つの道をはみ出さないうずと歩いてきたという感じがな。

都 結局そうなんでしょうね。

立松 でも、一度引退したときには、逸れようと思ったわけでしょう？

都 そうですね、それをやりたかったですね。

立松 でも、できなかった。

都 そうですね。自分がふつうに戻ろうと思っていても、人から見ると、なんであの人バスに乗ってるのかなとか、なんであやつて並んで買い物してるのかなって、すごく不思議に思われるとか、そういう質問を受けたりとか。

立松 実際にそういう質問を受けちゃうんですか。

都 そうですね。けっこうやめてからでも「前へいらっしやい、前へいらっしやい」とかそういう……（笑）。なんか特別待遇を受けてしまっつていうか。それは自分にとってはやっぱり

困ったことかもしれないけれども、でも、都はるみという名前で二〇年やってきたことのありがたさというか。ああ、そんなふうにしていただけるのかなっていうようにありがたく思いましたけどね。

立松 都はるみがしみちゃってるんですね、世間に。

都 そうですね。自分ではまだ間に合うかなと思ってたんですけどね。(笑)

立松 でも、名言だったですね「ふつうのおばさんになりたい」っていうのは。都 そうですね(笑)。ほかに言いようがなかったものですから。

立松 その間に音楽プロデューサーを一回やられて、新人を出したでしょう? よくプロ野球の名選手が名監督じゃないと言われるけれども、やっぱり都はるみの域に達するというのは、ちよつとなかなか考えられないことだから……。

都 うーん……。

立松 やっぱそれは自分で歌っちゃったほうが早いわけだね。難しいでしょう、伯楽になるっていうのは。

都 いやあ、でも自分で歌っちゃったほうが早いっていう、そういうもんでもないんですよ。やはりあれはあれでわたしはよかったなと思つてますしね。わたしは名選手を育てられなかったかもしれないけれども、でも、夢は捨ててません。やっぱりまだチャンスがあれば、もう一回やってみたいっていうのはありますね。人に歌をうたえることを教えるっていうのは、

すごくおもしろいことなんですよ。想像以上のものを相手が返してくれると、自分もそこですごい喜びを感じるし、それ以下だとすごい怒りを感じてしまうというか、ものすごく差があるんですけどね。それをやっていまはよかったなと思ってますし、これからもやりたいです。

立松 そうですか……、大きくなったんですね。自分の歌だけで一生懸命というレベルじゃないんだ。

都 いや、いまは自分のことをプロデュースするのに一生懸命で……、なかなかうまくいかないんですけどね。(笑)

立松 それはないでしょう。

都 いえ、ほんとです。自分自身をコントロールするってほんとになかなかできないんですよ。

●「らしい」のばかりでは自滅する

立松 このあいだのステージを見せていただいて、すこしずつ変わりたいんだなという感じは、ちょっとしましたけどね。

都 はい。変わらないとまた意味がないと思うんで。でも変わるのって時間がかかりますね。

立松 やっぱいいままでの都はるみの実績っていうのが確固としてあるわけだしね。シングルが一〇〇曲めですって？

都 はい。ちょうど一〇〇枚めですね。

立松 すごいなあ。そういう石を積んだような道ができちゃってるわけで、変わりたいといつてもいままでの歌……、『アンコ椿は恋の花』とか『好きになった人』とか、ああいうものを歌わないとお客さんは納得しないでしょう。

都 というか……、自分自身もあんまり古いものを、すべてスパッと捨てるというのはやりたくないんですよ。だからいまは古いものでもいい部分は利用して、新しい部分と混ぜ合わせながらなんかやりたいなあという感じなんですけどね。

立松 その新しい部分を引き入れて認めてもらうというのは、ほんとに難しいですよ。

都 ええ、やっぱり一、二年じゃできないかなあ、と。

立松 それはいままでの歌謡曲とは違う静かなバラードとか、たぶんそういうのを言ってもらえるんですけど、ぼくはいいと思ったけどなあ。歌の表現がどんどん突き進んでいくと、歌謡曲も変わるのかなあという、そういう感じで……。

都 そうですね。立松さんは、ほんと歌謡曲と言ってくださるからわたしはすぐうれいんですけれども、演歌とかっていうふうなジャンルでくくられてる部分がありますでしょう。それをぜったいにしたくないんですよ。何年かかってもいいし、ほんと総まとめで全部、歌謡曲だと。

立松 そうだね。

都　なんかこう……、細かく、細かくジャンル分けされてる世界のなかで、過去やってきたからね。

立松　でも結局、いまの時代とか、人の精神とか、そういうものを歌っているわけでしょう？　ぼく、ちょっと曲の名前がわからないんですけど、静かな子どものハミングが入るやつ……。

都　『飛べない鳥へのレクイエム』っていう曲です。

立松　そうそう、あれなんか時代の空気を敏感にとらえているなあというか……、なんかホロツときましたけど。

都　そうですかあ。(うれしそう)

立松　はるみ節という、うなりの世界と、それから力まずに未来に向かっていくようなメッセーじをね、もちろんあんまりメッセーじは強くないけど、柔らかく歌うでしょう。ああいう歌もうたえるんだなと思った(笑)。失礼な言い方だけど。

都　いえいえ、そんなこと。

立松　あの歌をうたったときに、会場ではため息が出ましたよ。それからあちこちで「らしくないよね」っていう声も聞こえたけど(笑)。でも、らしいのばかりやってたら……。

都　そう、それはもう自滅に一步足を踏み込むっていうことですから。やっぱりらしくない部分。(笑)

立松　このあいだ、うちの田舎のおふくろがね、ぼくがはるみさんのCDばかり聴いてるも